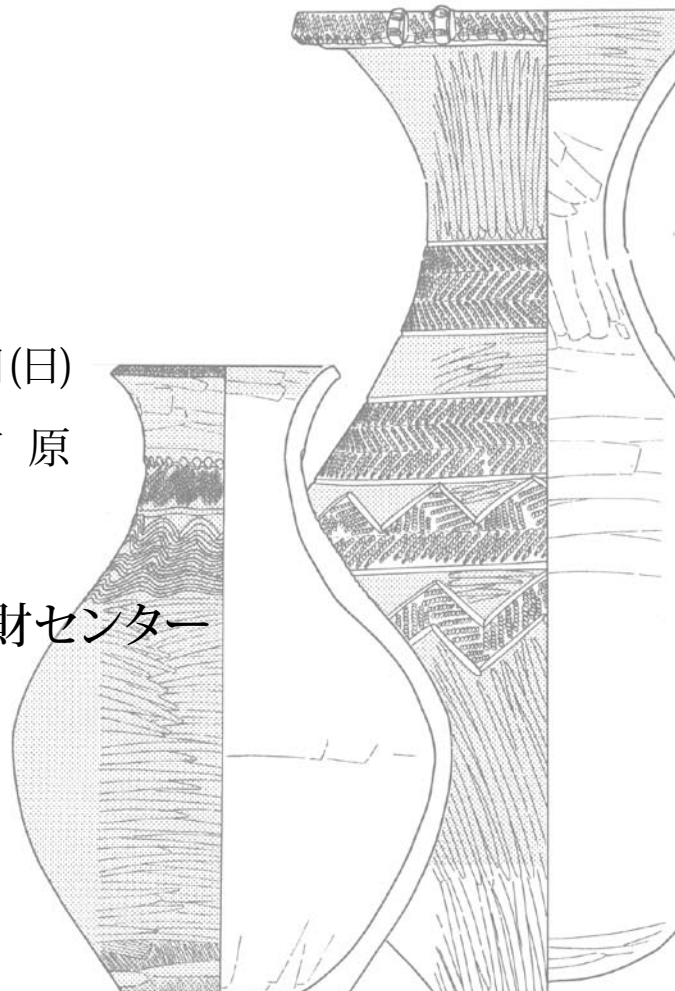
第　20　回

市原市文化財センター
遺跡発表会要旨

平成17年度



平成17年11月27日(日)
サンプラザ市原

財団法人　市原市文化財センター

開催にあたり

私たちが生活を営む市原市は、穏やかな気候と豊かな自然環境を背景に、縄文時代のいにしえより途切れることなく人々の生活の舞台となってきました。その痕跡は、今もなお市内の随所に残されており、わが国最古の銘文を刻んだ「王賜」銘鉄剣が出土した稲荷台1号墳や、日本最大級の規模を誇る上総国分僧寺・尼寺跡など、全国的にも著名な遺跡も数多く存在します。

財団法人市原市文化財センターは、埋蔵文化財の調査・研究機関として昭和57年に設立され、市民の方々が郷土の歴史への関心を深め、文化財の大切さを理解していただけるよう、遺跡発表会などの普及事業にも力を入れてまいりました。この遺跡発表会は、今回で節目ともいえる20回目を数えるにいたりました。

本日は、昨年度発掘を行った調査遺跡と、先般整理作業が終了し報告書が刊行された国分寺台地区の遺跡についての報告、および弥生時代を代表する遺跡である「環濠集落」をテーマとした発表を行います。そして、講演会では、慶應義塾大学の安藤広道先生に、環濠集落にかかわる考古学研究の最新成果をご披露いただくことになりました。弥生時代は激動の時代だといわれています。テーマに掲げられた「なぜムラを溝で囲むのか」の意義を、ダイナミックに流れる歴史の一齣として触れていただければ幸いです。なお先生には大変お忙しい中、快く講演を引き受けていただきました。あらためて感謝を申し上げます。

最後になりましたが、財団法人市原市文化財センターは、本年度末をもって解散することとなりました。遺跡発表会も、20回という節目を迎えた今回をもって財団としての開催は最後となります。これまで文化財センターにご協力いただいた多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

平成17年11月27日

財団法人市原市文化財センター
理事長　藤　田　国　昭

かんごうしゅうらく

市原市の環濠集落

根田代遺跡
弥生時代中期

南岩崎遺跡
弥生時代中期

潤井戸西山遺跡
弥生時代中期

第 20 回　市原市文化財センター遺跡発表会
プ ロ グ ラ ム

1. 開催日：平成 17 年 11 月 27 日（日）
2. 場　所：サンプラザ市原　２階プラザホール（発表・展示）
3. 日　程

9：30　受　付

10：00　開会の言葉

理事長挨拶

調査・研究の成果発表

10：10 ～ 10：40　「市原条里制遺跡蛇崎八石地区」……　西野雅人　(2)

10：40 ～ 10：50　休　憩

10：50 ～ 11：20　「加茂遺跡 A・B 地点」……　浅利幸一　(4)

11：20 ～ 11：50　「能満城跡遺跡」……　近藤　敏　(6)

12：00 ～ 13：00　昼休み

13：00 ～ 13：50　「市原市の環濠集落」……　大村　直　(8)

特別講演会

13：50 ～ 15：30

「なぜムラを溝で囲むのか －環濠集落の意味を読み解く－」

慶應義塾大学助教授　安藤広道　(14)

15：30　閉会の言葉

4. 展示公開時間

9：30 ～ 15：45

根田代遺跡 環濠断面

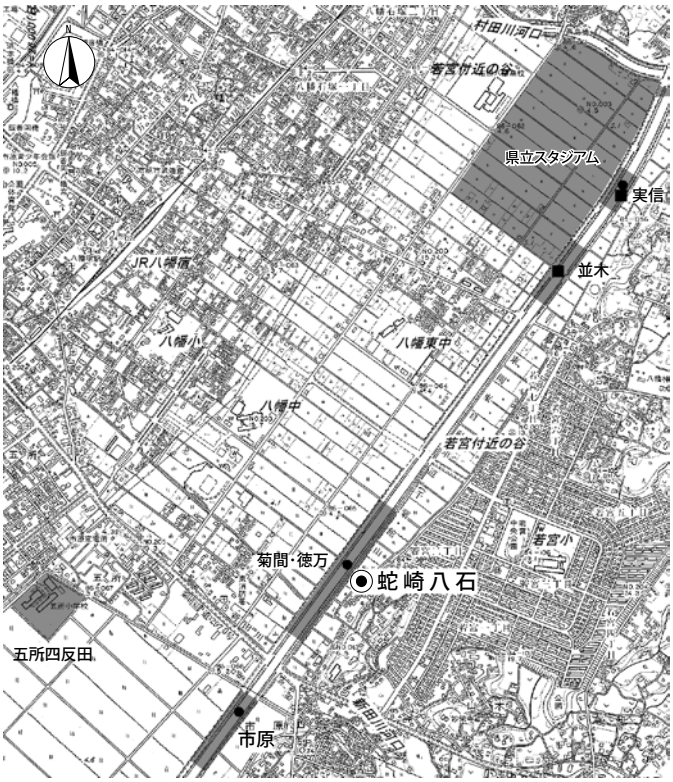
市原条里制遺跡蛇崎八石地区

所 在 地　市原市菊間95-4・95-5

市原条里制遺跡は、菊間から国分寺台にかけて広がる台地と、八幡・五井の市街地に挟まれた、長さ4.1km、幅0.9kmの広大な水田地帯をひとつにまとめた遺跡群の名称です。これまでに、館山自動車道の建設と県立スタジアム建設計画に伴って大規模な調査が行われており、縄文時代早期・中期の低地性貝塚、弥生時代から中世の水田、奈良・平安時代の古代官道跡などが検出されています。また、木簡や木製人形、農具を含む多量の木製品や建築部材などが発見されています。多量の木製農具が出土したことで有名な「五所四反田遺跡」もまた、当遺跡群の一角にあります。今回は、平成16年4月の数日間、わずかな面積を発掘したに過ぎませんが、縄文中期のものと推定される低地貝層を発見することができたので、その内容と発見の意義について報告します。

調査概要　調査地点の水田面は標高4.5mで水平ですが、過去に堆積した土層は全体に海側(右図の左側)に傾いていました。約1m下の5層では、田んぼの「あぜ」らしいものが見られましたが、時代を特定することができませんでした。8層・9層は縄文中期中ごろ(今から約4,500年前)の海辺にできた貝層(上部貝層)です。貝層の下の10層は木の根や木片を多量に含む泥炭層(イネ科の植物などが分解せずに残った層)で、そのなかには薄い貝層(11層。下部貝層)が入っています。残念ながら10層から下は、細い溝状に掘り下げてみたところで調査を終了しており、時期は不明です。

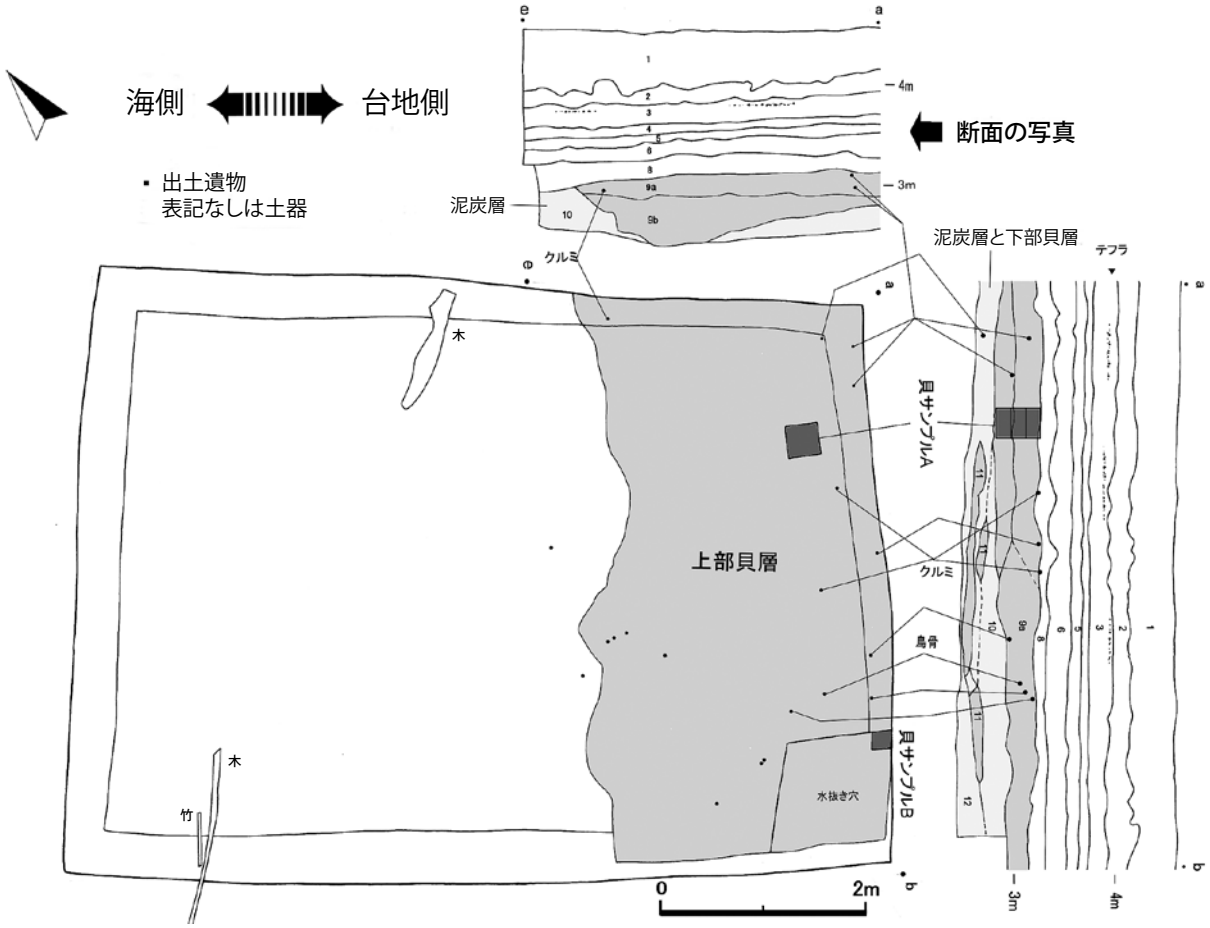
上部貝層の貝は土ごと持ち帰って細かい目のフルイを使って洗いました。すると、たくさんの貝殻に混じって、比較的多くのクルミ・ドングリと、少量の骨(タヌキ、カモ、エイ、キス、アジ、アユなど)がみつかりました。貝はイボキサゴが最も多く、ウミニナ類を加えると9割を超えます。カワザンショウガイとハマグリも多く見られました。イボキサゴとハマグリは、この時期の人たちが食材としてもっとも有用とした2種です。一方、アシなどに付着して生活する小型の巻貝であるカワザンショウガイは採取されたのではなく、貝層付近に棲んでいたものです。ウミニナ類もこの時期には食用にしておらず、近くに棲んでいて混じったものと考えられます。



発見の意義　周辺の調査では、低地に流れこむ河川の河口付近で、魚をとる網のおもりがたくさん見つかっており、時期は中期なかごろが中心です。この時期には、東京湾沿岸に巨大な貝塚をもつむらがたくさんつくられました。近くでは草刈貝塚や山倉貝塚があり、一年を通じてひとつのむらにたくさんの人が集まって生活をして

いました。市原条里制遺跡群の位置は、当時の海岸線にあたり、イボキサゴ漁、ハマグリ漁、小魚の網漁が行われた漁場であったと考えられます。漁場に向かうアシが生えた湿地で貝類を加工または消費した光景を思い浮かべることができます。一方、下部貝層と泥炭層については、縄文早・前期を中心とした貝層と泥炭を含む層が何枚も重なっているようです。自然に堆積したものと、人が棄てたものの両方がありそうですが、かなり土器を含んでいますから、今後の調査が期待されます。

なお、今回の調査の成果は報告書『市原市市原条里制遺跡(蛇崎八石地区)・仲山遺跡』2004として刊行されています。



市原条里制遺跡蛇崎八石地区　調査区・断面写真

加茂遺跡Ａ・Ｂ地点

所 在 地　市原市加茂１丁目～西国分寺台２丁目

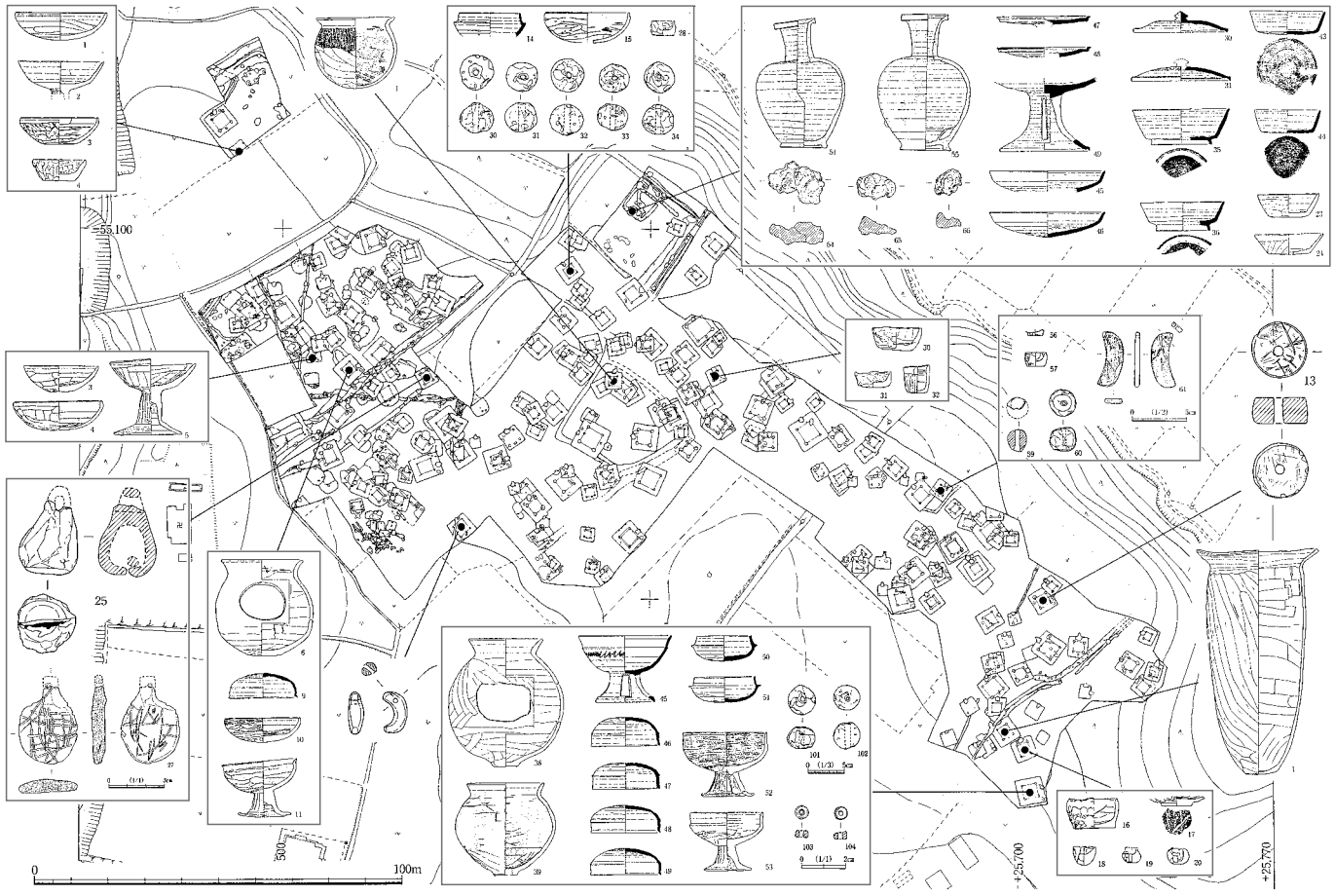
調査概要　遺跡の調査は、国分寺台土地区画整理事業に伴い、昭和50年７月～52年４月に15,280㎡の調査が行われました。発見された遺構は、縄文時代から平安時代の竪穴住居跡247軒・方形区画遺構３基・溝24条・大型竪穴状遺構５基・地下式土壙墓15基・土壙墓20基です。竪穴住居跡の時代別では、縄文時代前期(7,000年前)1軒、弥生時代中期(1世紀頃)5軒、弥生後期～古墳出現期(1～３世紀頃)28軒、古墳時代中期後半～終末期(5世紀中頃～７世紀頃)162軒、奈良～平安時代前期(7世紀初頭～９世紀中頃)46軒です。遺跡の主体は、弥生時代中期～後期と古墳時代中期後半～奈良・平安におよぶ集落跡の存在でした。集落跡全域は調査されませんでしたが、平成11～13年に南東側に隣接した地域で行われた、加茂遺跡Ｄ地点の調査でも同時期の住居跡が調査されたことにより、西・北・東側では台地縁辺までほぼ集落跡が広がることが確認されました。南側の限界線は確認されませんでしたが、遺跡の立地地形から察して、東西300m・南北350mの範囲に集落跡が存在したことが想定できるものです。

集落の変遷は、弥生中期後半から継続した集落が古墳出現期にいったん途絶えた後、約200年の空白の後の古墳時代中期後半の５世紀中頃に新たな集落として現れました。集落は５世紀後葉に最も盛行します。この後、衰退と盛行を繰り返しながら、平安時代前半の９世紀中頃に至って消滅し、これ以降、中世前期に墓域となり17世紀頃まで続いたものと推察されます。

当遺跡を特徴づけるものに、竪穴住居跡から出土した、手捏ね土器・ミニチュア土器・土玉・土製丸玉・石製模造品・土製ペンダント・土鈴・高杯などの祭祀遺物を挙げることができます。祭祀遺物の出土量は、さほど多くはありませんが古墳時代中期後半の集落の出現当初から見ることができ、これは竪穴住居跡に住む人々の日常的な祭祀遺物とも見なすことができます。また、奈良時代の祭祀遺構で方形区画溝を伴うと考えられる井戸状遺構の中からは、須恵器甕・土師器大甕・台付甕・非ロクロ杯・須恵器有台椀・須恵器杯・須恵器高杯・須恵器長頸壷・平瓶・鉄滓など祭祀で使用された遺物が多量に廃棄され出土し、一部は竪穴住居跡の遺物と接合しました。

国分寺台地区での古墳時代集落跡の分布は、弥生時代後期・古墳出現期～前期が台地縁辺を中心に広範囲に分布するのに対し、古墳時代中期以降(400年頃)から国分寺建立以前の奈良時代前半期には、向原台遺跡・加茂遺跡・台遺跡・御林跡遺跡の立地する北西辺の東京湾に面する地域にほぼ限られる様です。一方、５世紀代の古墳分布は前期古墳に比して、その数を減らしながらも台地縁辺から奥深くに位置する傾向があり、稲荷台・持塚・南向原・東間部多の円墳を主に単独ないし群を構成して存在します。古墳時代後期～終末期の集落跡の分布は中期集落跡と同様であるのに対し、古墳群は向原台・西谷・根田・諏訪台・山倉古墳群と台地縁辺の好適地に数多く造られ、諏訪台古墳群では６世紀中葉以降の円墳・前方後円墳25基以上→終末期には前方後方墳と方墳100基以上を数え古墳築造ラッシュになります。しかしながら、この古墳を築いた人々の住む集落は、台地上では加茂遺跡・台遺跡を中心とした国分寺台の北西辺部に限られ、この頃に、人々の居住環境に対する意識の大きな変化があったことが読み取れます。

加茂遺跡A・B地点と周辺遺跡の祭祀遺物



加茂遺跡A・B地点の祭祀関連と主要遺物

能満城跡遺跡（のうまんじょうあと）

所 在 地　市原市能満629番地先

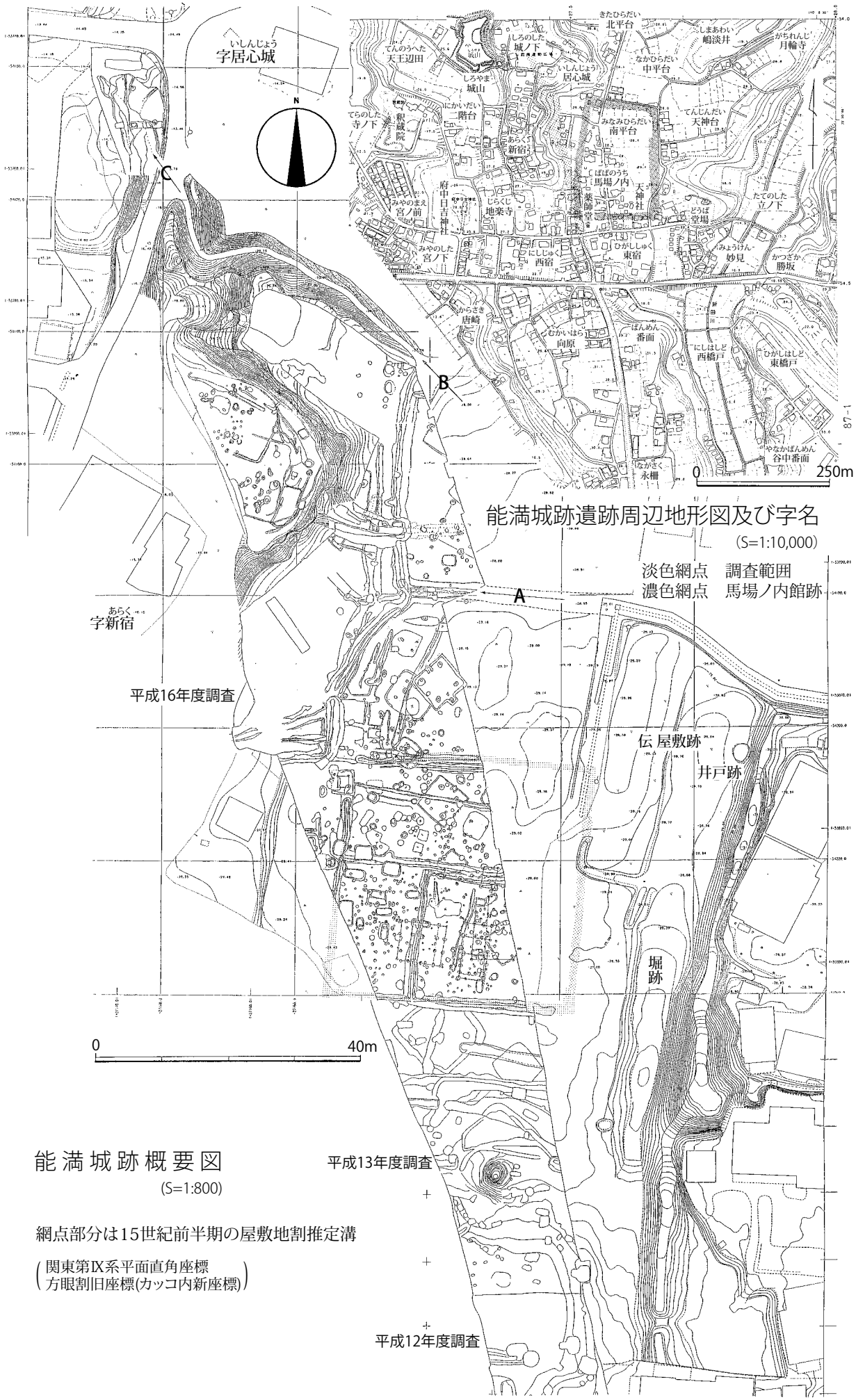
調査概要　遺跡は市道建設に伴い平成11年度から調査され、調査対象面積は8,320㎡、本調査面積5,506㎡となり、多様な遺構が検出されました。能満城跡遺跡は、能満本村すべてを含む1km四方に及び、能満遺跡群はその下層として南北2kmの広大な範囲で、調査区は右図右上淡い網点部分です。調査区南側は現在の道路部分で削平され、遺構は検出されませんでしたが、能満公民館脇から北側部分は、馬場ノ内館（ばばのうちやかた）跡の南西部に当たり、上辺5m、底辺3mの堀状遺構が検出されました。またその堀の範囲が南北220m、東西150mであることが、地形観察によってわかりました(右図上濃い網点部分)。その規模は、中世国衙（こくが）遺構や、上総守護所（かずさしゅごしょ）跡と想定しても、大規模な区画と考えられます。

平成12年度調査では、馬場ノ内館跡の西南部の堀跡が15世紀前半期には埋没し、新しい区画溝に破壊されていることが確かめられました。その一連の区画溝も16世紀には、台地整形されて区画墓地になり、墓坑が作られ廃絶しています。台地整形区画墓域の北側には、古墳の墳丘を利用して、塚が削りだされ、周辺では五輪塔（ごりんとう）の部材が出土しています。古墳跡は古墳前期の甕等が周溝内で出土しており、北側には同時期の住居跡も存在しています。平成13年度調査区には、12年度と同じ東西方向の浅い区画溝が数条入り、古い遺構を破壊しています。これらの遺構確認面は、1707年降下の宝永（ほうえい）火山灰下にあり、多くの溝は17世紀には埋没しています。平成13年度と16年度本調査区の境界には、溝が東西に走り、上辺幅1.5m前後規模の一辺40mの方形区画溝が検出されました。

右図(1：800)の網点範囲が、方形区画溝推定部分になり、後に東西方向に溝を再度掘削して南北に分割しています。方形区画内の調査面積は6割程度ですが、掘立柱建物跡が3棟以上確認され、方形土坑がまとまって検出されています。建物は2間×3間を基本とするが軒を設けており、棟方向を南北としています。北西隅に溝の切れ間があり、出入り口と考えられます。区画溝の覆土上部には宝永の火山灰が認められ、15世紀前半の陶器片が検出されています。中世以前は弥生時代後期、古墳時代前期、後期の竪穴住居跡があり、縄文時代の遺構遺物はきわめて少量です。方形区画より北側には中世の遺構遺物がなく、近世遺物が溝に混入されます。しかし別に東西溝が現道下で検出され(右図←A)、同じ方向の区画溝であることから、この範囲に同様な中世遺構が存在する可能性があります。

今回の調査区域の北側に、堀切状の地形(右図←B)があり、これは字居心城（いしんじょう）との字境にある区画溝と考えられます。この溝は調査によって、現道を跨いで(右図←C)低地まで延びていることが、確認されました。低地面の調査では、宝永火山灰の堆積下に矢印Cの延伸があるので、堀切状の溝は17世紀以前と考えられます。低地面は火山灰降下前に埋め立てられ、乾地化していたと思われます。

今回の調査で、馬場ノ内館跡が14世紀代には廃絶して、その後溝や墓地、小区画屋敷が建設され、周辺地域が大きく改変されていることがわかりました。馬場ノ内館跡の区画溝覆土から出土していた15世紀前半の遺物が、この時期紛れ込んだと考えられます。小区画屋敷は在家有力農民屋敷跡と想定され、中世村落の変遷が明らかになりました。また能満地区の中世歴史、国衙衰退後の城館の変遷も具体的に理解され、城山の16世紀と考えられる能満城跡や、近隣の大型城郭白船城（しらふねじょう）跡も意義深いものとなります。この地区は上総の歴史を研究する上で、益々重要な地域となりました。



能満城跡概要図

(S=1:800)

網点部分は15世紀前半期の屋敷地割推定溝

(関東第Ⅸ系平面直角座標
方眼割旧座標(カッコ内新座標))

市原市の環濠集落

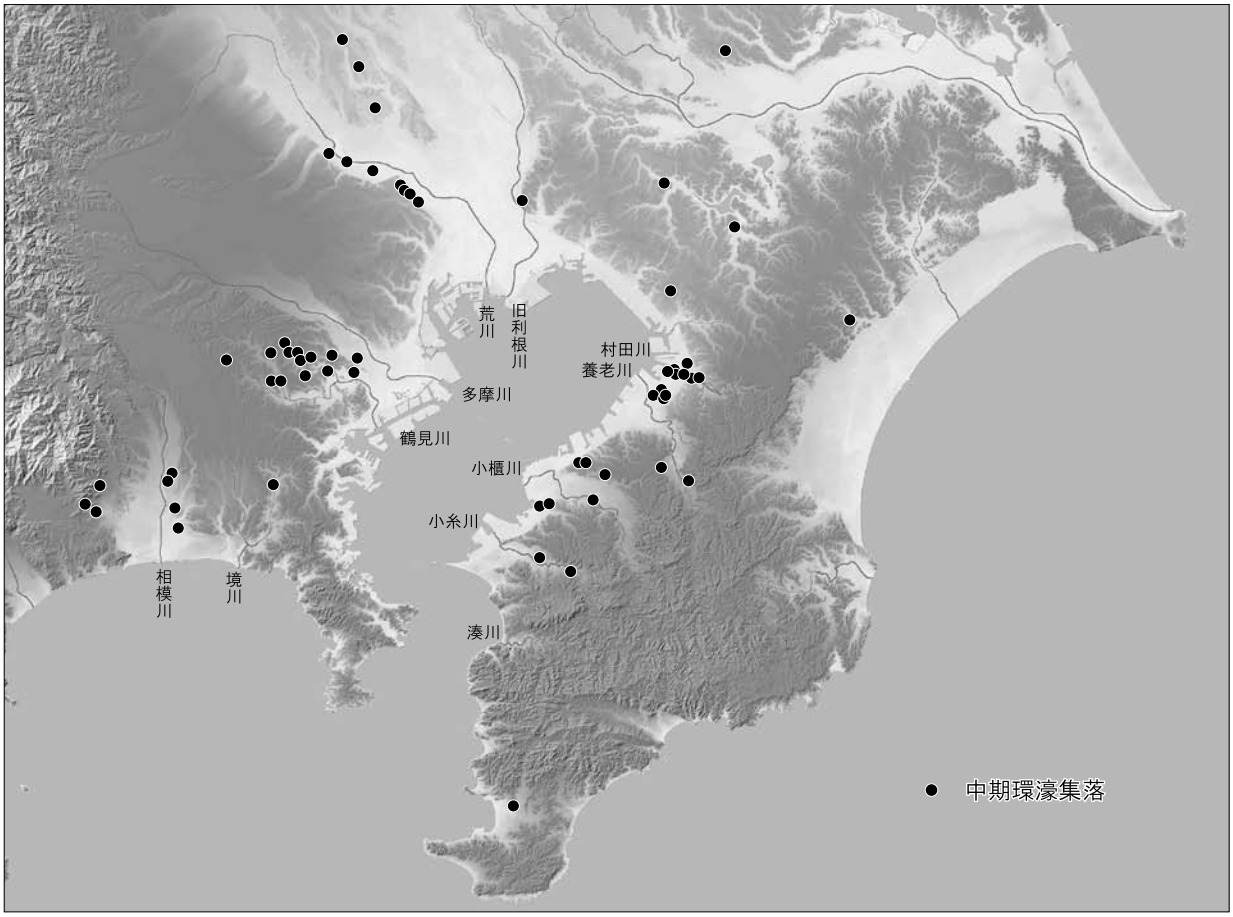
弥生時代は、「倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり」といった中国史書の記事にもみられるように、列島規模の政治体制をつくりあげた古墳時代に向かって飛躍をとげた時代であり、ムラの周囲に堅固な溝をめぐらした環濠集落は、弥生時代を代表する遺跡であるといわれています。一時期マスコミに大きく取り上げられた、佐賀県吉野ヶ里遺跡や奈良県唐古・鍵遺跡の、幾重にもめぐらされた濠や、復元された物見櫓は、激動の時代を強烈に印象づけるものとなりました。

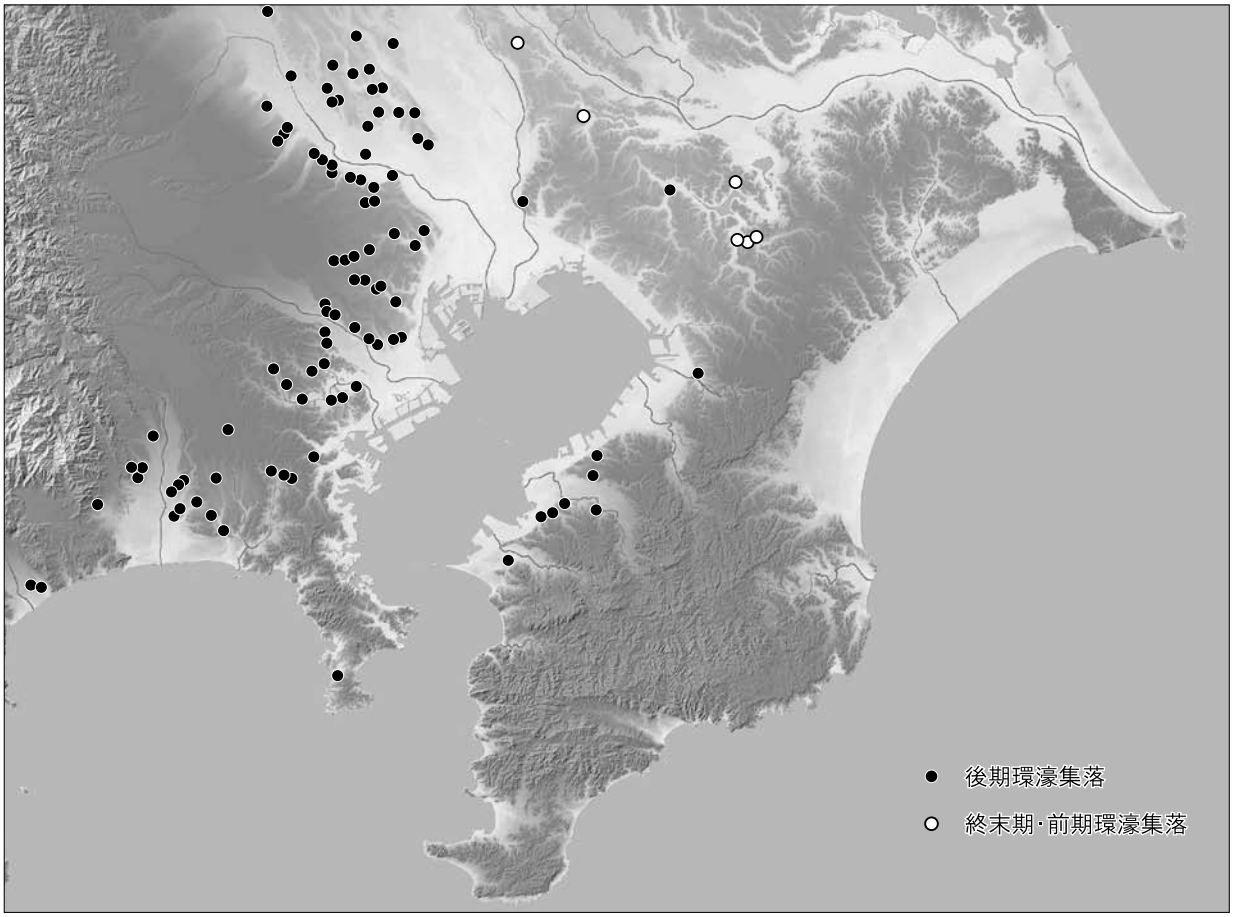
しかし、環濠集落は、北九州や近畿地方に限られた集落形態ではありません。現状では太平洋岸地域で、現在の利根川流域まで分布を広げています。南関東地方において、環濠集落ないし環濠に特徴的な断面V字溝が検出された遺跡は、管見によるだけでも177遺跡を数え、千葉県下ではこの内41遺跡が所在します。中でも、市原市域の環濠集落は、現状で13遺跡において検出されており、弥生時代中期後半（西暦紀元前50～紀元後50年頃）の南関東地方では、神奈川県鶴見川流域、東京都荒川流域とともに、濃密な分布を形成しています。

南関東地方では、おおむね本格的な農耕集落の形成と同時に環濠の開削が始まりました。市原市域の環濠集落は、村田川下流域、養老川下流域右岸、養老川中流域に分布上のまとまりが認められます。とくに、国分寺台地区の根田代遺跡、台遺跡、向原台遺跡、菊間地区の菊間遺跡、菊間深道遺跡、菊間手永遺跡、大厩地区の大厩遺跡、大厩浅間様古墳下層遺跡(大厩遺跡群)など、近接して環濠集落「群」を形成しています。この時期は、東京湾岸平野部に直接面する台地縁辺部への集落の進出が認められ、さらに、姉崎地区の砂堆上や、養老川や村田川の低位段丘面など低地部での遺跡の検出例も増加しつつあります。これは、沖積地に対する積極的な水田開発によるものと考えられ、菊間手永遺跡に近接する市原条里制遺跡（p.2参照）では、弥生時代中期後半の土器を多量に出土した自然流路と、極小区画水田多数が検出されました。水田範囲は、実信地区、並木地区、仮称県立スタジアム地区をあわせ、北東－南西方向550m、北西－南東方向350mにおよんでいます。水田開発にともなう大規模な労働投下を、環濠集落への集住の一要因としてとらえることも可能であると思われます。

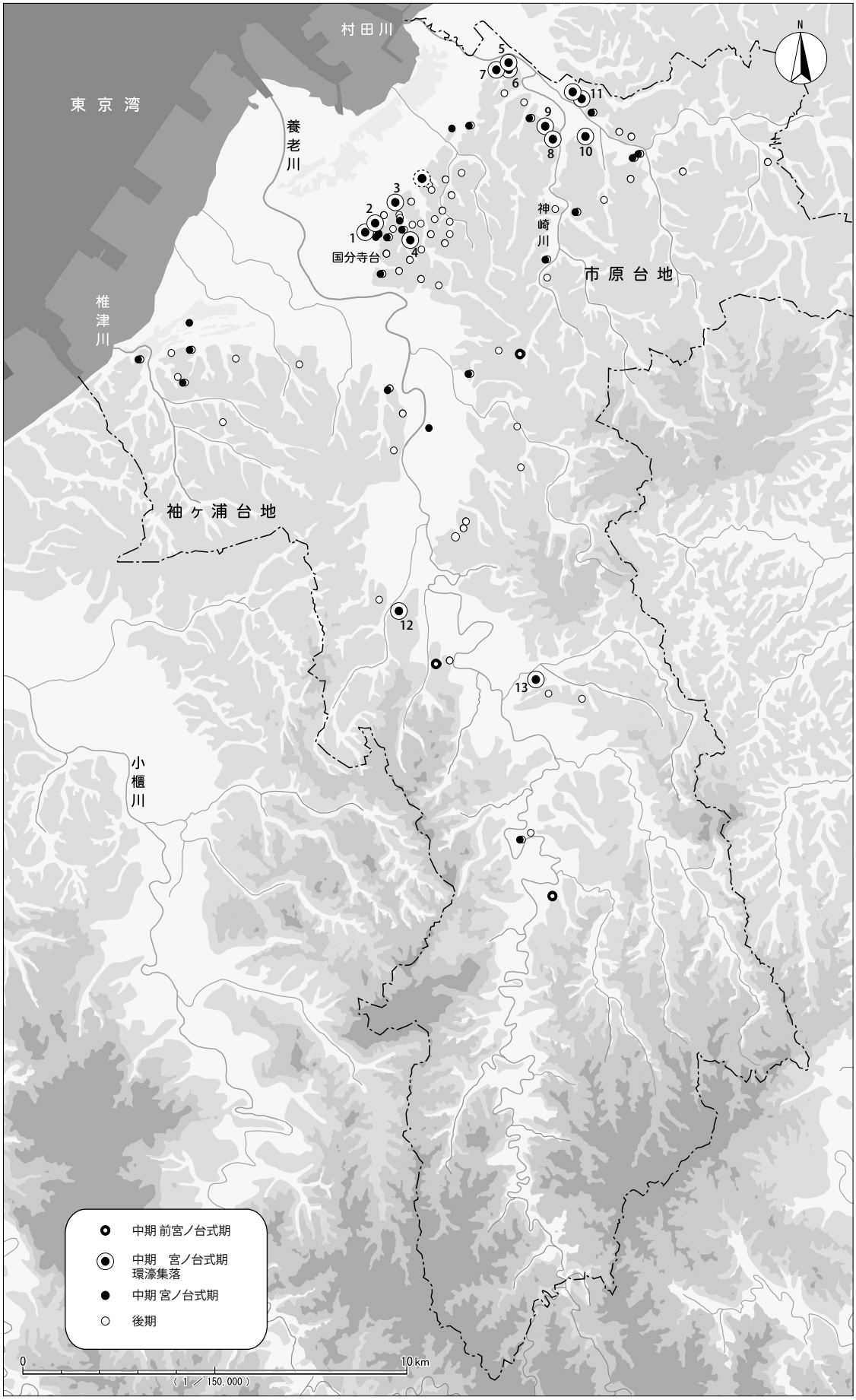
昨年度整理作業が完了した根田代遺跡は、市内の環濠集落では、最も内容が明らかとなった遺跡です。根田代遺跡は、養老川右岸の市原台地北西端の独立丘陵上に立地し、環濠規模は、北東－南西方向の長軸長外径で203.5m、北西－南東方向の短軸長で約133m、環濠区画総面積は約19,830㎡を測ります。環濠幅は調査時最大で約3m、本来は、幅5m、深さ4mに達していたと推定されます。環濠区画内は、残念ながら調査前に破壊が進み、全容を明らかにすることはできませんでしたが、区画内全体で70～80軒程度の竪穴住居跡が存在したと推定されます。しかし、根田代遺跡の環濠は、長期にわたって維持されることなく、弥生時代中期終末段階には環濠内に多量の土器が投棄されています。市内の他の環濠集落も、中期後半段階を中心とし、おおむね中期末までには環濠の機能を停止していたようです。

市内には、確実に弥生時代後期と考えられる環濠集落は確認されていません。後期環濠集落は、相模湾岸から東京湾西岸の荒川流域、大宮台地に濃密な分布を形成しますが、東京湾東岸地域では、東京湾西岸と地理的接点をもつ地域に限られる傾向があります。しかし、東京湾東岸の村田川流域から小糸川流域にいたる地域では、後期において、関東地方でも有数の大規模な遺跡群を形成しました。





南関東地方環濠集落分布図

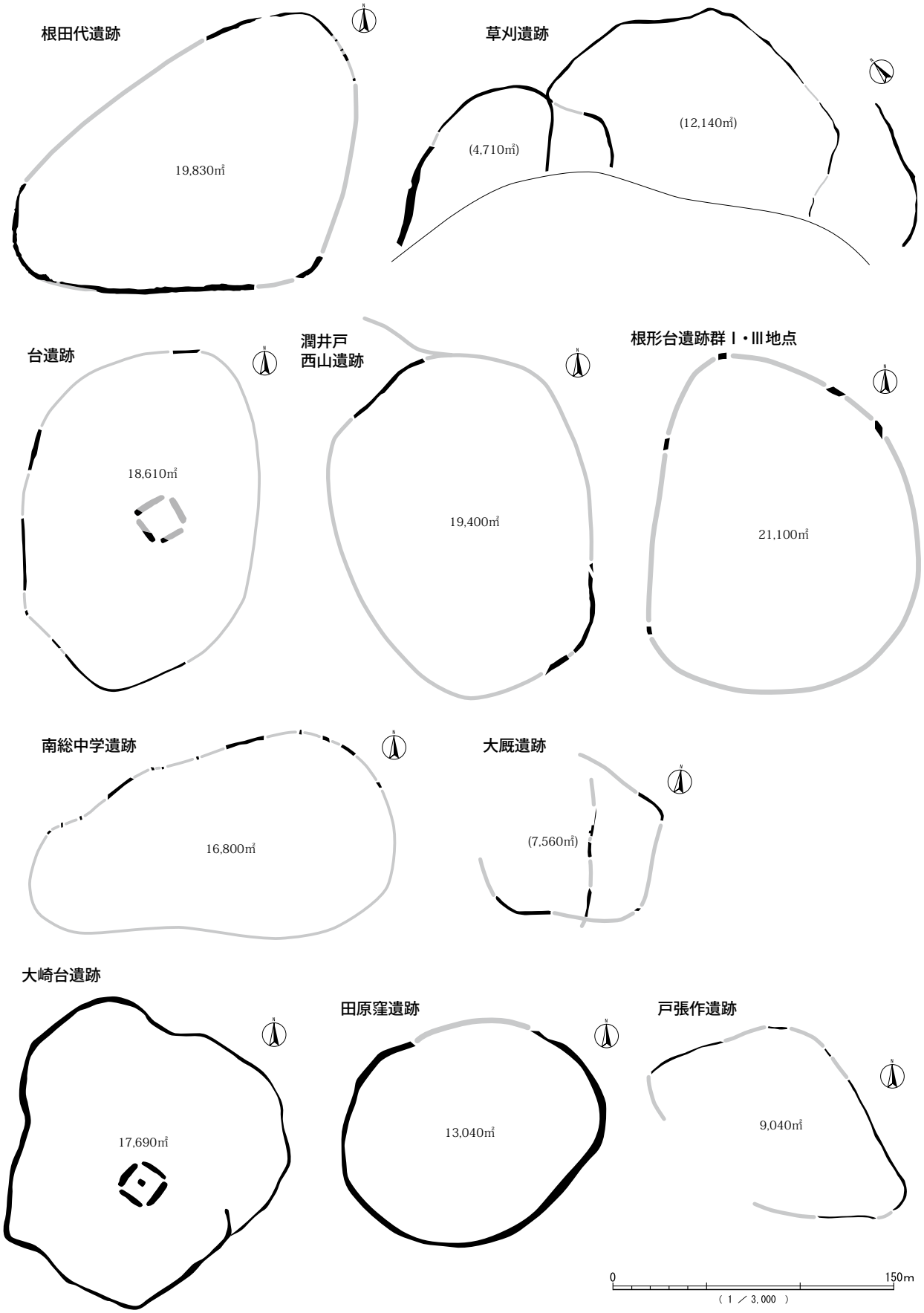


市原市域の弥生時代中後期集落

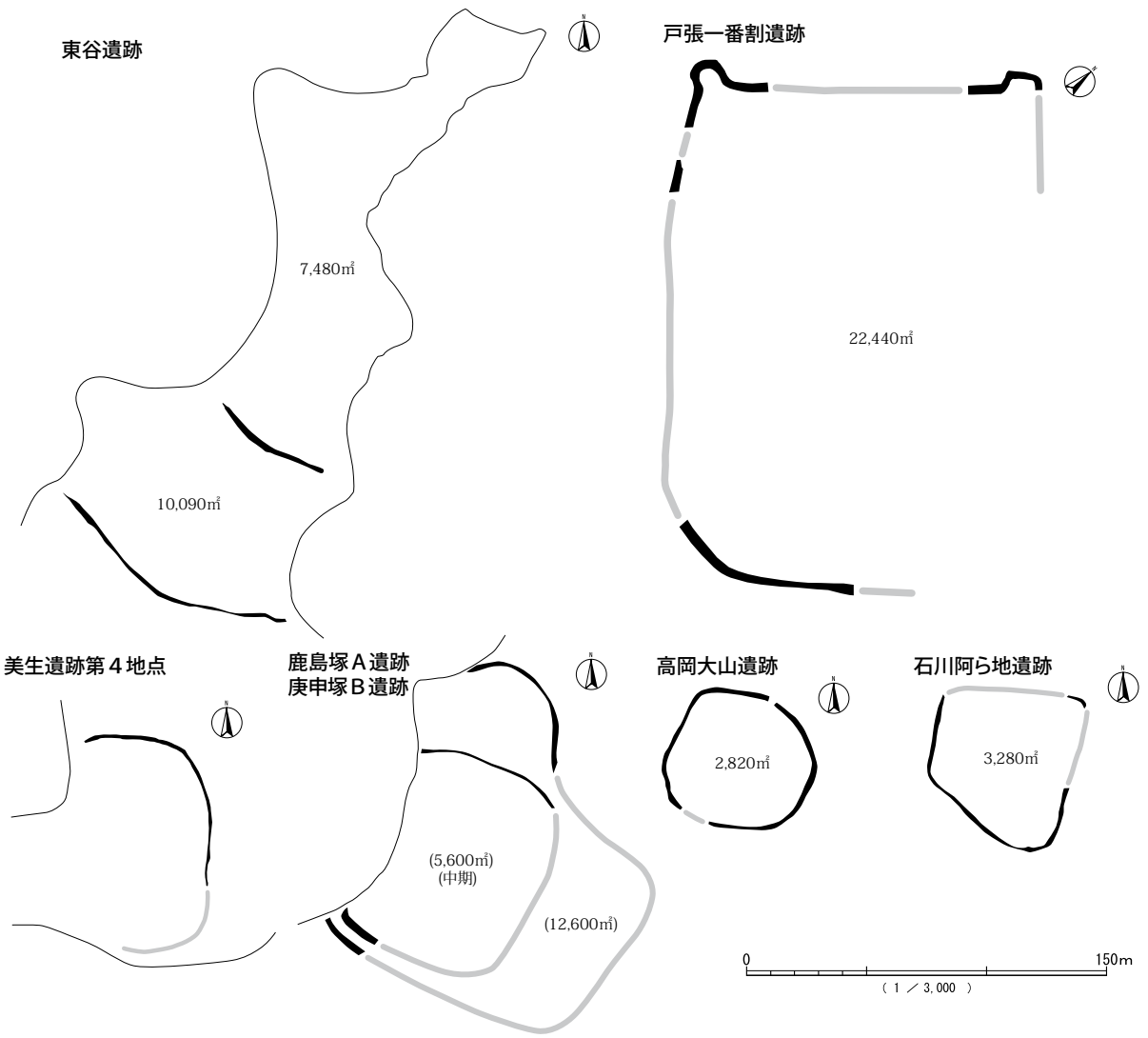
市町村	遺　跡　名	時　期	市町村	遺　跡　名	時　期
野田市	二ッ塚殿台遺跡	終末前期初	**市原市 2**	**台遺跡Ｃ地点**	**中期**
柏市	戸張一番割遺跡	終末前期初	**市原市 4**	**祇園原貝塚上層**	**中期**
市川市	国府台遺跡	中期／後期	**市原市 12**	**南岩崎遺跡**	**中期**
市川市	須和田遺跡	後期	**市原市 13**	**南総中学遺跡**	**中期**
佐倉市	大崎台遺跡	中期／末前初(条濠)	袖ヶ浦市	美生遺跡第4地点	後期
佐倉市	高岡大山遺跡	終末前期初	袖ヶ浦市	西ノ窪遺跡	中期
佐倉市	石川阿ら地遺跡	終末前期初	袖ヶ浦市	根形台遺跡群ⅩⅥ地点	
印西市	向ノ地遺跡	終末前期初	袖ヶ浦市	根形台遺跡群Ⅳ地点(堂野遺跡)	中期
八千代市	田原窪遺跡	中期	袖ヶ浦市	根形台遺跡群ⅩⅣ地点(関野遺跡)	後期
八千代市	道地遺跡	後期	袖ヶ浦市	根形台遺跡群Ⅰ・Ⅲ地点(境No.2遺跡)	中期
千葉市	戸張作遺跡	中期	袖ヶ浦市	西原遺跡	中期
東金市	道庭遺跡	中期	袖ヶ浦市	滝ノ口向台遺跡	中期／後期
市原市 11	**草刈遺跡**	**中期／後期(条濠)**	木更津市	東谷遺跡	後期
市原市 5	**菊間遺跡**	**中期**	木更津市	鹿島塚Ａ遺跡(庚申塚B遺跡)	中期／後期
市原市 6	**菊間深道遺跡**	**中期**	木更津市	大山台遺跡	後期
市原市 7	**菊間手永遺跡**	**中期**	木更津市	千束台遺跡	中期／後期
市原市 8	**大厩遺跡**	**中期**	富津市	前三舟台遺跡	後期
市原市 9	**大厩浅間様古墳下層**	**中期**	君津市	鹿島台遺跡	中期
市原市 10	**潤井戸西山遺跡(草刈尾梨遺跡)**	**中期**	君津市	畝山遺跡	中期
市原市 2	**向原台遺跡**	**中期**	館山市	萱野遺跡	中期
市原市 1	**根田代遺跡**	**中期**			

千葉県環濠(条濠)集落一覧

根田代遺跡・台遺跡環濠集落



千葉県の環濠集落(1)　弥生時代中期



千葉県の環濠集落(2)　弥生時代後期～古墳時代前期

この時期の集落は、台地上広範囲に竪穴住居跡が展開し、環濠区画内に集住する環濠集落とは異なる、開放的な集落形態をとっています。

弥生時代後期の相模湾沿岸地域、武蔵野台地（むさしのだいち）における環濠集落形成の契機は、東海地方からの大規模な集団移住という具体的な事実をもって検証されつつあります。一方、東京湾東岸地域は、東海地方からの影響は希薄で、外部に対して閉鎖的で安定した社会を形成していたのかも知れません。

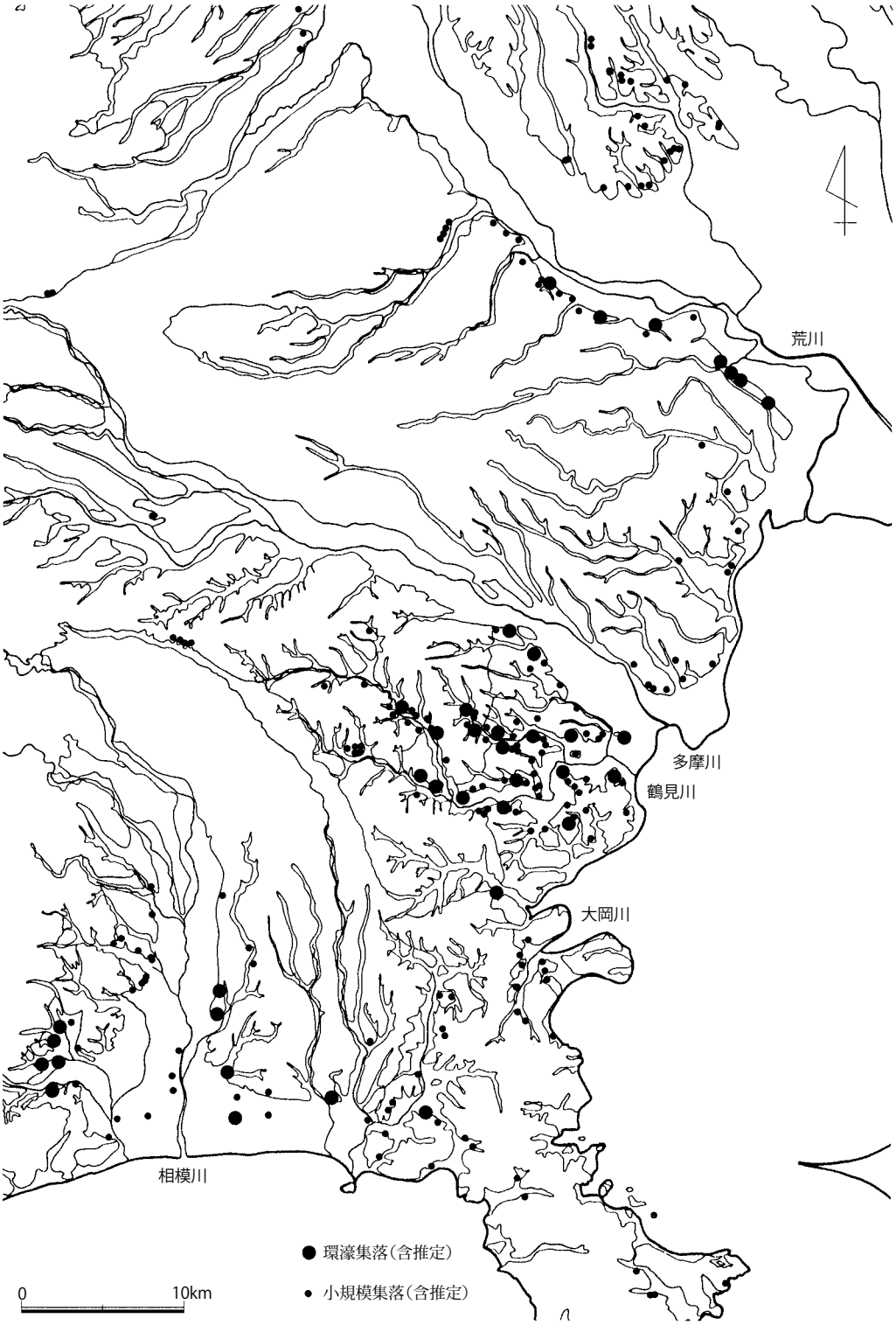
弥生時代は、「倭国乱」の時代と言われています。しかし、各地域における環濠集落の成立と解体は、時期、契機とも多様であり、中国史書には記されてはいない具体的な「史実」は、それぞれの地域の歴史の中で解明されなければなりません。

《 特別講演 》

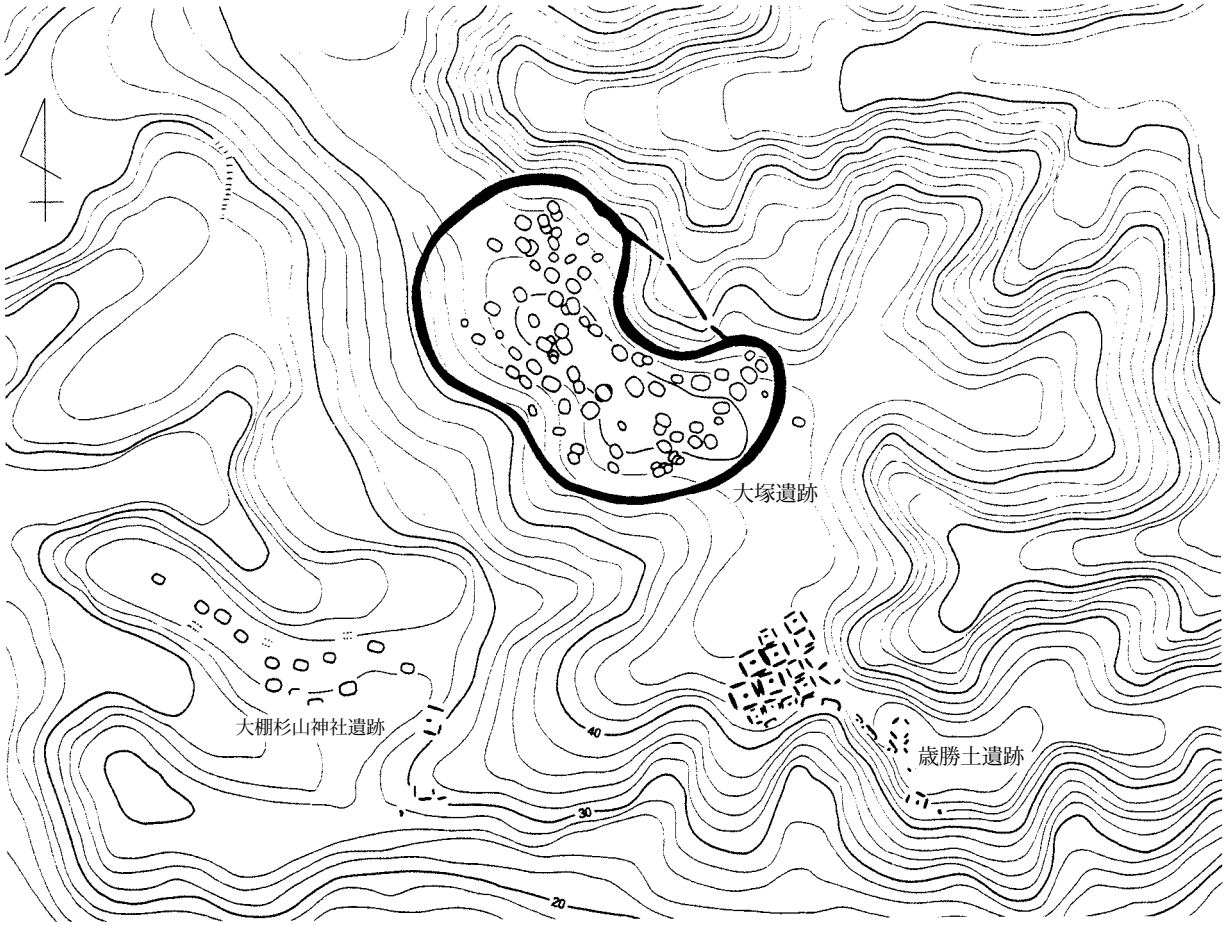
なぜムラを溝で囲むのか

— 環濠集落の意味を読み解く —

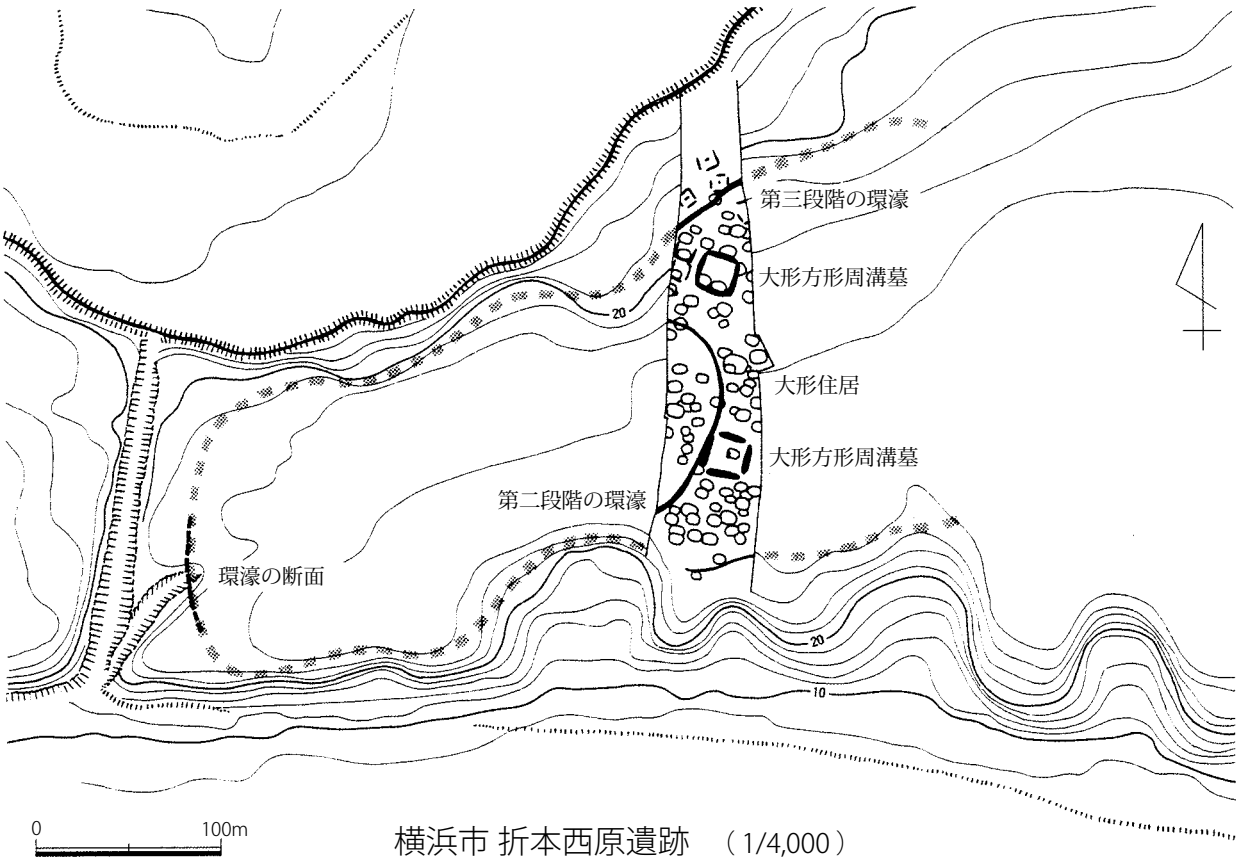
慶應義塾大学
安　藤　広　道



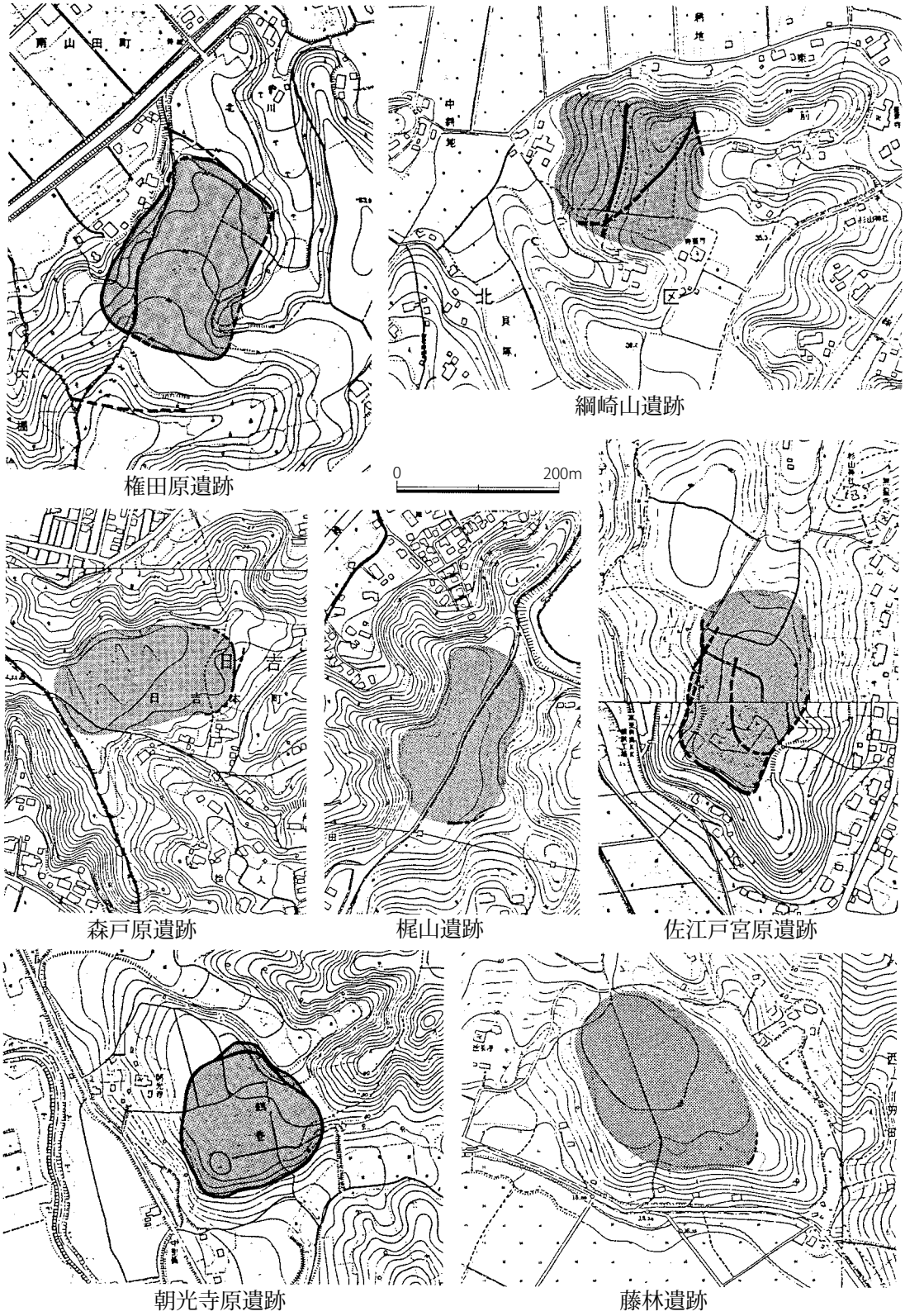
東京湾西岸域における弥生時代中期後半の集落遺跡分布



横浜市 大塚・歳勝土遺跡　（1/4,000）



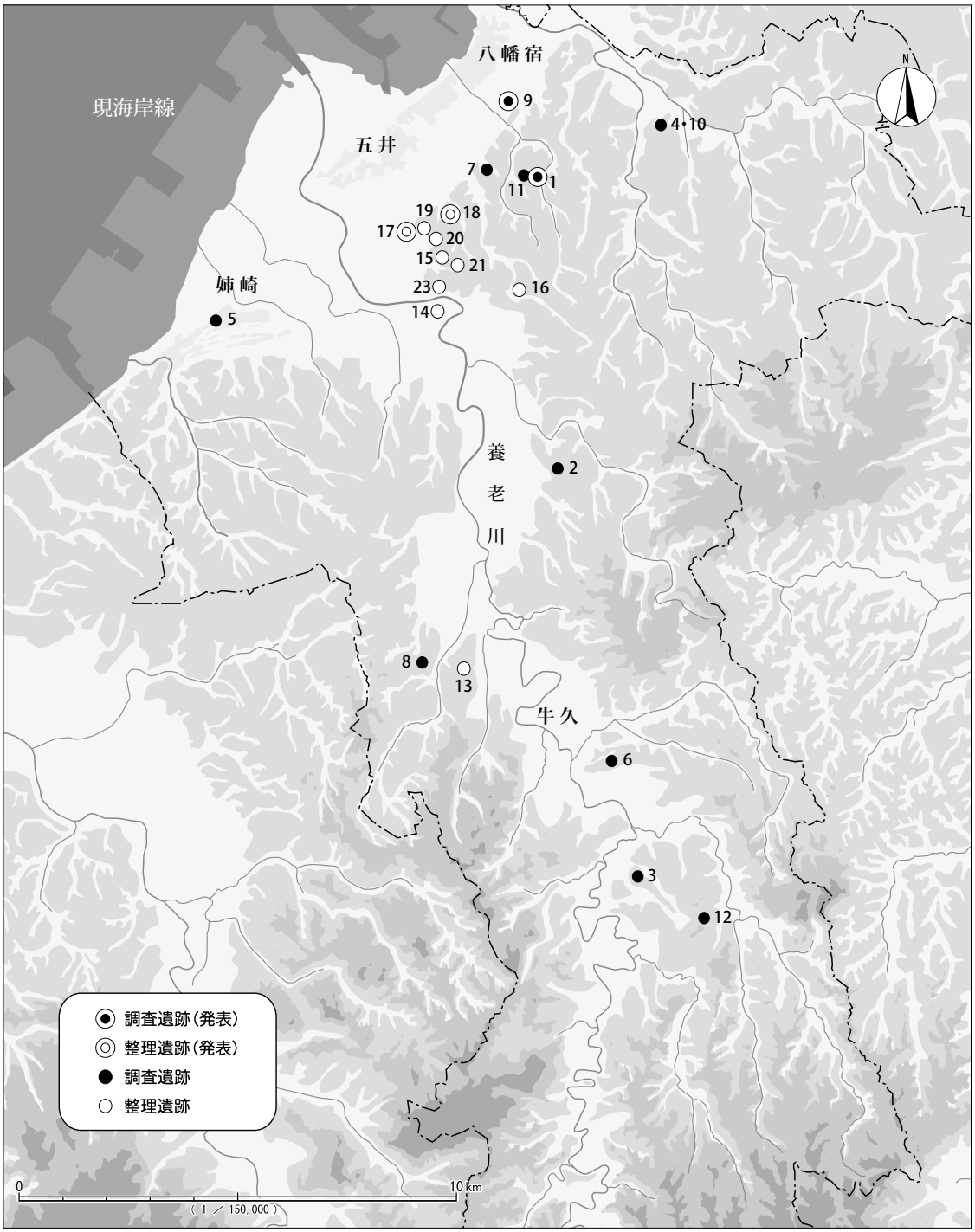
横浜市 折本西原遺跡　（1/4,000）



鶴見川・早渕川流域の主要な環濠集落と立地　（1/7,500）

（各図とも、安藤広道「弥生時代集落群の地域単位とその構造」
『考古学研究』50－1、2003　より転載、一部改変）

平成 16 年度 財団法人市原市文化財センター調査遺跡



No.	遺跡名	調査種別・対象面積	No.	遺跡名	調査種別・対象面積
1	**能満城跡**	本調査（3,756㎡）、発表遺跡	12	山小川遺跡	確認調査（810㎡）
2	松崎中里遺跡	確認調査（1,550㎡）	13	南岩崎遺跡群	整理（7,500㎡）
3	不入遺跡	確認調査（1,186㎡）	14	西野遺跡群他	整理（402,440㎡）
4	潤井戸西山遺跡D地点	確認調査（2,500㎡）	15	上総国分僧寺跡	整理（58,750㎡）
5	姉崎山新遺跡	確認調査（258㎡）・本調査（3㎡）	16	西広貝塚	整理報告（8,790㎡）
6	江子田遺跡	確認調査（162㎡）・本調査（4.7㎡）	17	**根田代遺跡**	整理報告（6,860㎡）、発表遺跡
7	郡本遺跡群	確認調査（460㎡）	18	**加茂遺跡A・B地点**	整理（15,120㎡）、発表遺跡
8	仲山遺跡	確認調査（339㎡）、本調査・整理報告（64㎡）	19	御林跡遺跡	整理（10,150㎡）
9	**市原条里制遺跡蛇崎八石地区**	本調査・整理報告（188㎡）、発表遺跡	20	長平台遺跡	整理（4,790㎡）
10	潤井戸西山遺跡D地点	本調査・整理報告（1,070㎡）	21	荒久遺跡	整理（50,190㎡）
11	能満遺跡群地楽寺地区	本調査（119㎡）	23	諏訪台古墳群	整理（131,700㎡）

第　20　回
市原市文化財センター
遺跡発表会要旨

発 行 日　　平成17(2005)年11月27日
編集・発行　　財団法人　市原市文化財センター
〒290－0011　千葉県市原市能満1489
TEL　0436(41)9000
印　　刷　　三陽工業株式会社
千葉県市原市五井5510-1
TEL　0436(22)4348